25)「解体新書」以降の頭蓋・顔面骨用語の変遷

A Change of the Japanese Anatomical Nomenclature on Cranial and Facial Bones after "Kaitaishinsho" (1774)

九州歯科大学　○嶋村昭辰，小林　繁
北九州市　　上瀉口　武

Akitatsu Shimamura and Shigeru Kobayashi, *Kyushu Dental College*
Takeshi Kamigatakuchi, *Kitakyushu City*

解体新書以降の解剖学用語の変遷については尾持（1976）の報告が，日本解剖学会における用語の改訂に直接かかわったこともあって，具体的で詳しい．しかし，頭蓋・顔面各骨に関してだけは歯牙を含めてあまり触れられていない．

杉田玄白らは，オランダ語の解剖学原書，通称ターヘル・アナトミアの訳し方は「翻訳」，「義訳」，「直訳」の三通りであることを解体新書の凡例に述べている．頭蓋・顔面骨15種用語のうち，3種を除くと他はすべて翻訳にあたる．これらの用語のうち，どれが現代のいわば，オフィシャルな解剖学用語に結びついたのか，以後の重訂解体新書（1798），正骨範（1807），整骨新書（1810），解剖攬要（1881），解剖學名彙（1905），改訂解剖學名彙（1936），新舊對照解剖學名集覧（1944），戦後発行の解剖学用語などを対比させながら変遷をたどってみた．

翻訳以外の3種の一つは，現代の「下鼻甲介」相当で，唯一の直訳≪私奔牛私（スポンキウス）≫をなしている．二つ目は「口蓋骨」相当にして，どの訳もあてはまらず，紛らわしく，最後の「鋤骨」相当もすっきりしない訳になっている．これら15種用語のうち，涙骨と舌骨だけが明治38年の日本語学名制定時に，上・下顎骨用語の「あご」が≪顎→鰐→顎≫と変化して昭和の年代に入ってから漸く現代用語として認知されてきた．

重訂解体新書では，翻訳にあたる用語の一部には解体新書以前の解剖学書で目につく難しい古い漢字があてられている．下鼻甲介と口蓋の骨相当には，正しく「海綿状骨」及び「口蓋骨」と義訳され，鋤骨相当も正しく義訳されたが見慣れない同じ意味の「金」が使われている．学名制定時には，本書からは前頭骨，後頭骨，篩骨，鼻骨及び口蓋骨がそれぞれ採り入れられた．

正骨範（1807）の用語の多くは，他の資料とは異なる言語である．解体新書発刊から30余年後の書であるが，あえて異なる用語で公にされた．著者の二宮彦可（1754～1827）については，1997年の本学会で発表（石州浜田藩口中医二宮彦可について）した．本書（漢文）の正骨総論には，正骨又は整骨は宗の時代に始まり，明の代に接骨科になったことや，当時の医書として「醫宗金鑑」等をあげている．また，本文中には当時の中国人の容姿が多く描かれて，部位の名称や術例を示している．

整骨新書（各務文献）は，上・中・下の三巻とその付録図「各骨真形図」一巻からなる．各務といえば，全身骨格の木骨模型が有名である．この用語は，全般的に一部は重訂解体新書に，一部は解体新書のものに類似する．独自用語の上鰐骨と下鰐骨は，当初の学名用語に取り入れられた．

明治の近代に入って，ラテン語による解剖学用語の世界的統一が図られたのが1895（明治28）年のBNA（Basel Nomina Anatomica）認定からである．前述の日本語による用語の制定は，それより10年遅れでBNAに基づく日本語が解剖学名彙（鈴木文太郎）として公表された．頭蓋・顔面骨用語の約半分は両新書から採られ，Concha nasalis inferior は「下鼻甲介」，Vomer は「鋤骨」として新用語に入れられた．

次の改訂解剖学名彙では，Os parietale が「頭頂骨」に，顳顬骨が側頭骨のカッコ付でやさしい名に変わり，「あご」が鰐から顎に戻る．

終戦近くなっての再度の改訂で，顳顬骨が完全に消えて側頭骨へ，楔状骨が蝶形骨へ，觀骨が頬骨へと新しい学名語に変わり現在に続く．ラテン語名が換われば，当然日本語もそれに相応しいものに変えるべきと思うのだが，下顎骨の関節突起や筋突起はそのままになっている．